『一心千里』
～走っていれば、見えてくる

永田 隆一

■ 第115回 ■

インフラを提供するということ
カウチ・サーフィンを夢想する

「会社というものは、雨の日も、風の日も、雪の日も、儲けなければなりません。福島社長が話してくださった、この言葉は重かったです。日本にたくさんの会社があり、その社長さんたちはゴーイングコンサーン、事業継続のために孤独な戦いをしています。勤め人で生活を守ってもらえる生き方もあるのに、色んな理由で社長になり、頭が下がります」。

「雄介君、大人になったな。そのとおりだ。来月から元号が令和にかわる。半年後には消費税が10％へ増税される。米中貿易冷戦の緊張感も高まっている。それでも企業経営者は『今年の秋は、雨か風か知らねども、今日の勤めの草を取るべし』頑張っているのだ」。

「亮太さん、今の社会を見ていると、不充足感と言うか、おかしなことに強い怒りを感じます。しかし、僕たちの世代の若者は、そういうことを考える連中がとても少ないのです」。

「それは君が物事に接した時、主体的に理解しようとしているからだろうね。決して悪いことではないよ」。

◇ ◇ ◇

「ボブ・グラハムという男がいた。俺の師匠の1人だった。ある時、アメリカのゴールド・ラッシュの話を始めた。1849年前後から砂金で一攫千金を狙ってカリフォルニアに多くの人が集まった。50万人。この砂金取りの人たちをフォーティナイナーズと呼んだらしい」。

「カリフォルニアにフォーティナイナーズというアメフトのチームがありますね。チーム名の由来ですね」。

「そうだ。グラハムは言った。砂金取りで金を儲けた人はほとんどいない。飲む・打つ・買うで散財してしまったからだ。では、誰が儲けたか。結局、インフラを提供した連中だ」。

「インフラですか」。

「線路を敷いてトロッコを提供した人、宿屋を提供した人、厚手のキャンバス布の作業服を考案した人、ジーンズの青い染料はガラガラ蛇が嫌う色で、噛まれても肌まで達しない厚さにしたそうだ。つるはしなどの工具を提供した人、砂金をお金に替えたりお金を貸し借りできる銀行を作った人、もちろん、飲む・打つ・買うの場所を提供したアンダーグランドの連中も」。

「いつの時代にも、頭が良くて行動力がある人間がいるのですね」。

「もちろん、2番手、3番手が参入してきたらしいが、やはり最初に始めた連中が、資金がある、智恵がある。競争に勝ち抜いて来たのかもしれないね」。

「きっと幸運にも恵まれたのでしょうね。そうか、インフラを握るのですね。現代のアマゾンやグーグルも、コンビニも、インフラですね」。

「グラハムの結論は、我々が製造する半導体製造装置は、装置ではない。エレクトロニクス産業のインフラなのだ。インフラとして市場に受け入れられるための価値を、皆さんで考えてほしい」。

「俺がいた会社で、グラハムの掲げたビジョンはファースト・イン・プロダクティビティーだった。一番重要なことは生産性だ。圧倒的な低ランニングコストを売りにした装置をインフラとして提供していた」。

「ワクワクしますね。その会社は今でも破竹の勢いですか」。

「ゴールド・ラッシュが終わったんだ」。

「えっ」。

「インフラのルールが変わってしまった。そして別の会社に買収されてしまった」。

◇ ◇ ◇

「雄介君、十年前にブカレストから手紙をくれたね」。

「はい、大学を1年休学して、バックパッカーをルーマニアからスタートしました。『カウチ・サーフィン』という言葉、ご存知ですか」。

「世界にはバックパッカーが大勢います。そして、どの国でも地方の人たちはとても親切です。家に泊めてくれ、食事まで無料で提供してくれます。日本の若者の話を眼をキラキラと輝かせて聞くことが楽しいのだそうです。少し仕事を手伝い、ボランティア的な仕事もしました。そして、ソファーをベッドがわりに提供してくれます。だからカウチ・サーフィンと言います」。

「雄介君、俺もカウチ・サーフィンしてみたい」。

（毎月連載）